
渚高のブラバン！ ～第1楽章～

音野ひびき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渚高のブラバン！ ～第1楽章～

【Nコード】

N7043M

【作者名】

音野ひびき

【あらすじ】

強豪運動部がひしめく石川県立金沢渚高校。またの名を『県内中学運動部員のメッカ』。全校生徒の64パーセントが運動部に所属し、より高みを目指して汗を流している。その一方で、文化部への加入率は全校生徒のわずか9パーセント。この物語は、そんな学校の、木管パートすらいらない弱小吹奏楽部の物語。「それでも私達は楽しくやっています！あなたもよければ入部しませんか？」

プロローグ

石川県立金沢渚高等学校。金沢市の西部に位置する全日制単位制高校だ。全校生徒数は七百二十一名で、女子よりも男子の方が若干割合が多い。学校の自慢は、校舎が海に面していて、屋上から雄大な日本海を一望できることだ。

そしてほかにも自慢できる事がもう一つある。それは、ずば抜けた運動部の強さだ。去年の夏の高校野球県大会でベストフォーの成績を収めた野球部や、男女ともに春高バレーの常連となったバレーボール部を筆頭にして、どの運動部も、県内の私立高校にも引けをとらない強さを誇っている。

しかし、その一方で文化部のおかれていた状況は悲惨だった。運動部に何もかも吸い取られて、慢性的な部員不足と予算不足に陥っていた。

その証拠に、放送部のお昼の放送は毎日同じアナウンサーで、しよっちゅう放送事故を起こしているし、合唱部は部員が二人で、最近名称を『重唱部』に変更していた。そして写真部は唯一の備品である一眼レフカメラが壊れて、今は『写ルンです』で活動している。ほかにも、新聞部は三人の部員が幽霊状態で休刊中。科学部と料理部は人数不足で合併して、未恐ろしい事になっていた。

この物語は、そんな学校の弱小吹奏楽部の物語。人数不足で木管楽器が居らず、大会にも出たことが無い……そんな部活で繰り広げられる、青春群像劇。

「やっぱり、吹奏楽って楽しいっ」

ブログ（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。今日から頑張っ
て書いていきますのでよろしくお願
いします！

自己紹介などはマイページ）
って言うのかな？）にありますので、
よければ見てやってください。

(1) 部室がピンチ!

開け放たれた窓から、春の香りが漂ってくる。その香りに誘われて、頭を外に出してみれば、そこはもう別世界だ。下を見下ろせば、咲き誇る桜の花。上を見上げれば、無限に広がる青いキャンパス。春風が頬を撫でていく。

「今日も絶好の撮影日和だな。」

嬉しそうな笑みを浮かべて、呟く少年。そんな時、足をついている方の世界から声が聞こえてきた。

「ただいまー。」

「おかえりー。どうだった？」

「どうだったって、何が？」

「何が？つて、部長会よ、部長会。」

「あー、部長会かあ。」

「あんたは今まで何しに行ってたのよ……。」

今日の空気のようにふわふわとした声と、今日の空のように澄んだ声。なんだか澄んだ声の方が、ふわふわとした声に飲み込まれそうになっている。

「ミーティング始めようと思うんだけど……美奈は？」

「美奈ならさつき、喉が渴いたからってジュース買いに行ってたわ。」

「水木は？」

「トイレ。」

「じゃあ、清水は？」

「窓のところであそがれてる。」

話を聞くに、どうやら俺は部長から見えていなかったようだ。そんなに影が薄いつもりは無いのだが……。

「清水ー。ミーティング始めるからこっち来て。」

さつきまで自分の存在に気づいていなかった部長に呼ばれ、少年は軽いため息をつき、元の世界へと戻っていった。

他の二人、西田美奈にしだみなと水木翔みずきかけるが帰ってくると、すぐにミーティングが始まった。議題は今日の部長会で伝えられた事の報告と、新入部員の勧誘について、それと明日の入学式での演奏について。

部長の宮村亜紀みやむらあきらが黒板の前に立って、トントンとミーティングを進めていく。

「今から黒板に書いてもらうのは、新入生の中で中学時代に吹奏楽部だった子たちよ。」

亜紀はそう言うと、後ろでただつつ立っているだけだった書記の美奈に、今日の部長会で配られた名簿を渡した。

「うわー、絶景……。」

名簿を渡された美奈は、思わず目を細める。そこには小さい文字で、新入生二百四十六人の名前が書かれていた。A4用紙三枚分の大作だ。

「この所属部活って欄に、吹奏楽部って書いてある子を抜き出せばいいのね？」

「うん、そう。」

美奈の質問にこくりと頷く亜紀。それを確認した美奈は、黒板と向かい合ってチョークを手に取り、カツカツと名前を書き始めた。

「A組の佐野原真琴さのはらまこと、C組の小熊千沙あぐまちな、D組の宮永愛みやながめぐみ、E組の高山たかや一穂まかずほ。よし、これで全員！てか、皆女の子だのおー。」

一通り名前を書き終えた美奈は、もう一度名簿と黒板を照らし合わせて確認をした後、ニタニタと不気味に笑った。

「えらく嬉しそうね……。てか毎回思うんだけど、なんであんなはそんなに女の子が好きなのよ……。」

「だってえー、可愛いじゃん、ギョツとしたくなるじゃん！年下の女の子なんか特にっ！ー！」

頬を紅潮させる美奈。鼻の穴がヒクヒクと大きくなっている。

「きもちわるいわよ、美奈……。そんなんじゃ、来る部員も来なく

なるわ……。」

完全に興奮状態に陥っている美奈を見て、亜紀は大きなため息をつき、頭を抱えた。

もしかして……いや、もしかしなくても、美奈は一年生の前には出さないほうがいいのかもしれない。

「と、とにかく！今年は一人でも多くの新入部員を集めなくちゃいけないわ。だから、ここに名前を書いた経験者達は、何としても確保しなくちゃいけない。美奈、絶対に一年生に飛びつかないでね！けどものがあるなんて噂が立ったら、一巻の終わりだからっ！！」
いつものものんびりふわふわしている亜紀が、珍しく声を荒げた。そしてその後、全員に向かって衝撃の一言を放つ。

「言い忘れていたけれど、軽音部より人数が少なくなったら音楽室が取り上げられます。」

その瞬間、いままでざわざわしていた音楽室が、水を打ったように静かになった。

「ちょ、ちょっとまって。そ、それどうということ?!」

しばらくの沈黙の後、座っていた椅子から身を乗り出して亜紀に詰め寄っていったのは、副部長の高畑たかはたけつかさ司。さっきの澄んだ声の持ち主だ。

「どうということって、そういうこと……。軽音部の朽木が部長会で提案して、承認されたの。同じ音楽をやっている部活なんだから、規模が大きいほうが音楽室を使うのは当然だって。私は反対したけれど、抑えられなかったわ。」

そう言って悔しそうな表情をする亜紀。そこに今度は清水和久しみずかずひさが、難しそうな表情をして口を挟んできた。

「それって、結構まずくないか。奴らアニメブームで絶好調だぞ。」

和久が言うとおりの、軽音部の勢力の伸ばしようは異常だった。軽音部が舞台のアニメに感化された生徒達によって、去年の四月に創部された軽音部は、部員数をあれよあれよと言う間に伸ばしていつ

た。そしてわずか半年で、渚高最大の文化部である吹奏楽部に追いついてきたのだ。この学校でここまでめまぐるしい成長を遂げた文化部は、他に例が無いだろう。

「もしも、もしも、軽音部に音楽室を明け渡す事になったら、新しい活動場所はどこになるんだ？」

「たぶん、今軽音部が使っている一階の玄関フロアじゃないかしら？」

亜紀のその答えに、再び沈黙が走る。

玄関フロアだと？音がウワンウワン跳ね返って、全校生徒から好奇のまなざしで見られる、あの玄関フロアだと？

「ちよ、ちよつと待て。そりゃいくらなんでもきつ過ぎるぞ。第一、楽器の保管場所はどうするんだ。玄関なんかじゃ置き場所が無いぞ。」

「さ、さあ……。楽器ぐらいは、今と変わらず楽器庫に置かせてもらえるんじゃないかな？」

「お、俺、パーカスだぞ?!毎日四階の楽器庫から一階の玄関まで、(ドラム)セットやらシロフォンやらマリimbaを運んで行けっ言うのか。」

「う、うん。そうじゃないかな。」

「マジかよっー!!」

まだそうなると決まったわけでもないのに、すっかりうなだれてしまった和久。

「と、とにかく、軽音部よりも多く部員を集めれば、今まで通り音楽室も使えるわ!清水にとって吹奏楽部が運動部化してしまう事も避けられる。『引退した三年生の分だけ取り返せばいいわ』じゃないか、一人でも多く新入部員を集められるよう頑張りましょう!」

パンつと一発手を叩いた後、亜紀は半ば強引に話をまとめた。その目の前では、俯いたままの和久が、なにやらぼそぼそと呟いている。

「もし音楽室のつとられたら、部活辞めよう……。写真部にでも入

る……。」

「それは許さないよっ！あんたが抜けたら五人以下になって同好会に降格しちゃうんだからね！！！」

和久の呟きを聞いた亜紀は、声のした方をキリッとにらみつけ、大声でそう言った。同好会に降格なんてことがあつたら、部費が出なくなつて楽譜すら買えなくなつてしまう。

「とりあえず、今から明日の演奏の練習を始めよう。演奏がうまくいけば、部員だつて集まるわ。スケジュールはこれから三十分間音出しをした後、時間一杯まで合奏。それでいい？」

亜紀のその指示に対して、「はい。」と間延びした返事をする四人。それを聞いた亜紀は、にっこりと微笑みながら手を叩き、次の指示を出した。

「じゃあ、楽器出して練習開始っ！」

(2) 最悪な目覚め

早朝五時。まだ太陽も顔を出していないこの時間に、少女はもがいていた。

「先生っ……。もう……。もうやめて……。くださいっ。これ以上……。ぐちゃぐちゃにしないで……。ください……。」

ベッドの上で苦しそうに声を上げる少女。まぶたがびくびくと痙攣を起こして、閉じた瞳からは涙があふれはじめていた。

こぼれた涙は少女の頬を伝い、そのまま枕におちていく。

「もう……。やめてっ!!」

真っ暗な部屋の中に突如、大きくて悲鳴にも近い声が響き、少女はようやく目を覚ました。

部屋には、はあはあと言う少女の荒い呼吸だけが響いている。

やがて呼吸が整ってくる、少女は仰向けの体勢で天井を見つめたまま、もううんざりといった感じで呟いた。

「また、この夢……。」

少女の額には脂汗がにじんでいて、寝起きのせいか夢のせいか、意識がはつきりしない。

その時、部屋の扉の方から急いで階段を駆け上がる音が聞こえてきた。そして扉を勢いよく開ける音も。少女の悲鳴を聞きつけた母親が、心配して様子を見に来たのだ。

「どうしたの、真琴?!」

「……。なんでもない。またあの夢。」

ベッドから上半身を起こした、真琴と言うその少女は、母親の顔を見つめて弱々しく笑った。

実は真琴が今みたいな悪夢を見たのは、今日が初めてではなかった。あることをきっかけにして、何度も何度も同じ夢にうなされるようになったのだ。

母親もそのことは知っていた。真琴がうなされるようになったとき

っかけも知っていた。しかしそれらが分かっているても、母親にはどうする事もできなかった。

「よりによって、入学式の日の朝に見るなんてね。」

眉間にしわを寄せて、母親は呟いた。その後には、大きなため息。「もう、お母さんがそんな顔したって仕方ないでしょ？」

真琴は苦笑いしながらそう言った。母親に対する真琴なりの気遣いなのだろう。けれどもその気遣いが母親にとっては逆に辛かった。

入学式は午後からだった。午前からなら、早く起きたって損をした気分にはならなかったのに、と思う。

真琴が悪夢にうなされるようになったのは、中学三年の夏の終わりだった。当時はそれこそ毎晩のように同じ夢にうなされ、まともに寝れない日が続いた。

けれども最近はその後も収まってきて、ようやくあの夢から決別で来たと思っていたのに……。

「ホント、何でこんな晴れ晴れしい日にあの夢を……。」

ベッドの端っこにお尻をのせて、下に垂らした脚をぶらぶらさせながら真琴は呟いた。

「ああー、いかんいかん。明るくいかなきゃ、明るくっ!!」

そんな愚痴を言ったところで、気分が晴れるわけが無い。それどころか、段々と気分が沈んでいってしまうだけだ。

それに気づいた真琴は、自分の頬を二回パンパンと叩いて、ベッドから飛び降りた。

身にまとった紺色のブレザーと、えんじ色のチェックスカートの制服、電車とバスを乗り継ぐ通学、中学校よりも一回りも二回りもでかい校舎、何もかもが新鮮だった。

そしてこいつも……。

「よっ、佐野原！」

校門から校舎まで続く短い一本道。そこをのんびりと歩いていた

真琴の肩を、後ろからいきなりバシツと叩いてきた少年。

「……痛っ！。い、いきなり何するのよっ！」

「ははっ、挨拶だよ挨拶。」

真琴に睨み付けられた少年だったが、動じる事も無く、笑ってそう言った。

少年の名前は江藤一哉^{えとうかずや}。真琴と同じ中学の出身で、三年間同じクラスだった。そして、高校も一緒。言わば腐れ縁だ。

そんな一哉の姿も、いつも見なれた学ランではなく、今日からは紺のブレザーとグレーのスラックス。なんだか新鮮である。

「クラス何組だった？」

「ん？A組だよ。あんたは？」

「A組だ。」

クラスは前もって物品販売のときに貼り出されていた。しかし中学の卒業式以来、二人が会ったのは今日が初めて。なのでこんな話が自然と出てきたのだが……どうやらまたも二人は同じクラスになったようだ。

「はあ……。」

「な、なによ、そのため息は?!」

大きなため息を漏らす一哉に、真琴は不機嫌そうな顔をしてそう言った。

もちろん、一哉も本当に真琴と一緒になのが嫌なわけではない。いちいち真琴の反応が面白いので、冗談をやって遊んでいるだけだ。

「まあ、また一年間よろしくってこつた。」

「はいはい。こちらこそよろしく。」

二人はこんな適当な挨拶を交わした後、これからの三年間を過ごす事となる校舎の中へと消えていった。

この時、あんなにもたくさんさんの大切な思い出が、この学び舎で作られていく事になるなんて……真琴も一哉も、そして他のメンバーも、思っではいなかっただろう。

(2) 最悪な目覚め(後書き)

『真琴』。実は彼女がこの物語のヒロインです。目覚めのシーンから、なにやら訳ありのようですが、それは物語の後半で徐々に分かっていきます。

(3) 新しい教室で

教室に入ると、黒板に大きく「入学おめでとうございます。」の文字。その隣には、座席表が貼つてあった。真琴と一哉はそいつを確認して、早速席に着いたのだが……。

「何で隣なのよ……。」

「さあな？運命の赤い糸とか。」

「気持ち悪いこと言うなっ！！」

あいうえお順で並べられた座席で、偶然にも二人は隣同士。当分こいつと一緒になのだと思うと、真琴の口から自然とため息が漏れた。別に、こいつが嫌いなわけではない。むしろ一緒にいると楽しいくらいだ。

だけど、こいつがいるとはしゃぎ過ぎて疲れてしまっし、周りの目を気にしてしまうと、こいつと仲良くつるんでいる事が、無性に小っ恥ずかしく感じる事もあった。

でも、馬の合わない人と一緒になるよりかは、ずっとずっとマシである。

机に肘をついて真琴がそんな事を考えていると、教室の後ろの方からこんな会話が聞こえてきた。

「部活どこにするか決めた？」

「うっん、まだ決めてないよー。」

話し方から想像するに、この二人も同じ中学校同士なのだろう。そんな後ろの会話を聞いていたのか、一哉が真琴に訊いてきた。

「お前は部活決めたのか？」

その質問に真琴は首を小さく横に振った。そして同じ質問を一哉に返す。

「俺は……まだはつきりとは決めてないけど、やっぱりハンドかな。」

眉間にしわを寄せて、しばらく考えるような素振りをした後、一

哉はそう答えた。

中学時代の一哉は、ハンドボール部のエースだった。別に幼い頃からやっていたとかそんなのでないが、持ち前の運動神経の良さが光ったのだ。きっと一哉なら、このハンド部でも大活躍できるだろう。

一哉の答えを聞いた真琴は、「ふーん。」と鼻を鳴らした後、こう言った。

「私はてつきり、また突拍子もない所にも行くのかと思った。」
真琴がそう言うのも無理はなかった。実は一哉、小学生のときは強豪の吹奏楽クラブで、ユーフォoniumを吹いていたのだ。その實力は、小学生の全国大会『全日本小学校バンドフェスティバル』でソロを吹いた位だと言う。

中学時代に吹奏楽部だった真琴は、どこからか漏れたその情報を聞いてひっくり返った。なんでそんな人間が、吹部に入らないでハンド部に行ったのか、理解が出来なかった。だから、休み時間に机に突っ伏して寝ていた一哉を叩き起こして、問い詰めた。

これが、二人が仲良くなったきっかけだ。

「お前こそ、吹奏楽部に入らないのか？」

ふと、一哉が聞いてきた。その瞬間、真琴の表情が曇る。

「入らないわよ、もう。入らないって決めたの。」

少し投げやりになったような言い方だった。そんな真琴の様子を見て、一哉も表情を曇らせる。

やっぱり、触れないほうが良かっただろうか……。

「まあ、帰宅部は進学とか就職に響くから、やめとけよ。」

一哉はそう言ったきり、真琴に話しかけられなくなった。

新生が次々と教室に集まりはじめていた頃、入学式の会場となる体育館では、着々と式の準備が進められていた。

入学式は、文化部が活躍できる数少ないチャンスだ。自分達で生けた力作を、二人がかりで壇上へ運ぶ茶道・華道部や、放送機器の

テストを行っている放送部など、どこも慌しく動き回っている。そしてそれは吹奏楽部も例外ではなかった。

「美奈ー、シ・フラットの音ちようだいー。」

「はいはい。」

部長の亜紀の指示が響く。体育館の隅の方、一箇所に集まった吹奏楽部員達は、今まさにチューニングを始めようとしていた。

今日の楽器編成は管打五重奏……もどき。トランペットが亜紀と翔、チューバが司、パーカッションが和久で、ピアノは美奈だ。普段は、翔と美奈はホルンを、司はユーフォニウムを吹いている。三年生が引退して極端に人数が減ったので、今日だけの特別編成だ。不足している中音域を全部カバーできるピアノは、本当に素晴らしい楽器である。

「よし、ピアノも四百四十二。これならいつも通りで大丈夫そう。」

ピアノの音でチューナーの針がほぼ真ん中にきたのを見て、亜紀はつぶやいた。

今は、基準となるピッチが、ピアノと管楽器で食い違ってないかを確認したのだ。

後は、全員で一回音を出してみても響きを確認し、本番さながら合奏を試みるだけである。

「じゃあ、全員ドの音！あ、ピアノはシ・フラットね。」

今日もいつも通り、亜紀の音頭で練習が動き始めた。

(4) 響く音、気になる音色

式の準備が終わった体育館には、すでに教職員や生徒会の役員、そして新入生の保護者達が集まっていた。

ちなみに、部活などで仕事を与えられていない在校生は、体育館のキャパシティーの関係などもあって、自宅待機だ。

そのかわり、昨日の午前中は全員が集まって、体育館など校舎全体の掃除に取り組んだ。入学式で迎える事ができないので、せめて全員で校舎をピカピカにして迎えようと言う、昔の生徒会の発案だ。

「もう一回確認するよ。」

もう新入生が扉の外で待機を始めているだろうという頃、体育館の隅の方の吹奏楽部では、亜紀が部員達の前に立ち、小声で何か話をしていた。

「司がA組の佐野原真琴さん、清水がC組の小熊千沙さん、美奈がD組の宮永愛さん、水木がE組の高山一穂さん、よ。」

亜紀は、昨日新入生名簿で確認した名前を挙げ、それを部員一人一人に割り振っていく。

実は入学式で、新入生全員の点呼が行われるのだ。その時に顔を覚えて、今後の勧誘を有利に進めようというのである。入学式に臨席する、吹奏楽部ならではの作戦だ。

「えー、まもなく入学式を始めたいと思います。保護者の皆様にお願いです。携帯電話の電源は」

亜紀がちょうど確認を終えたところで、教頭のアナウンスが始まった。

「いよいよ、入学式が始まるようである。」

「じゃあ、演奏頑張ろう！これを聴いて、入ろうと思う子もいるかもしれないしね。」

亜紀は最後にそう言って、正面に向き直った。けれどもも立ったま

まだ。

パーカッションの和久を除いて、他の部員達は全員椅子に座っているのに、亜紀はそれを背にして、一人前に飛び出す形で立っていた。

「ふふ、やっぱりちよつと緊張するわね。」

唇の先をぺるぺるとなめて湿らせながら、微笑む亜紀。その後トランペットをくわえて、息を二、三度吹き込んでみる。

「うし、頑張ろう。」

心の中でそう呟いて、亜紀は再度気合を入れた。

扉の向こう側では、新入生達が静かに式が始まるのを待っていた。「もうすぐ入場です。」

列の先頭、A組の担任がそう言うと、一気に緊張感が高まった。卒業までずっとこんな感じならいいのにと思っているのは、一年生の担任達だ。この、初々しいピリツとした雰囲気というのは、そんなに長続きしないものである。

「新入生入場！」

まもなく、体育館の中からアナウンスが聞こえて、扉が開かれた。それと同時に、小気味良いドラムスティックの音も体育館に響き渡る。

「じゃあ、行きますよ。」

A組の担任がそう指示を出すと、同時に吹奏楽部のマーチ演奏も始まった。

そしてそれを聴いて真つ先に反応をしたのが、真琴だった。

「『栄光をたたえて』……か。」

さすがは元吹奏楽部。曲をほんの数秒聴いただけで、名前を言い当ててしまった。

『式典のための行進曲「栄光をたたえて」』。二〇〇一年の吹奏楽コンクールの課題曲だ。

「薄っぺらいなあ……。ピアノ使ってごまかしてるし、コーラルカ

ツトしてるし……一体ここの吹部って何人なんだろう。」

一歩二歩と、マーチにあわせて歩きながら、真琴は演奏に耳を傾け続ける。

やっぱり音が薄っぺらい。スネアが若干不安定。

けれども真琴が一番気になったのは、そんな事ではなかった。

「ペット……無茶苦茶巧い。なにこれ……。」

聴く限り、一人の音である。しかしものすごく音圧があつて、スラーとかスタッカートとかの表情の付け方も巧い。そしてなにより、一つ一つの音がきらきらと輝いていた。

一体どんな人が演奏してるんだろうか。真琴は気になつて背伸びをしてみる。けれどもまだこの位置からでは見えない。

「気になる……気になる……。」

自然と歩幅が大きくなって、前の人にぶつかりそうになった。ものすごく気になる……。

「人数不足で先生が助っ人に入ってるのか？」

そんな憶測も真琴の中で飛び出した。

しかし次の瞬間真琴が目にしたのは、制服を着たロングヘアの先輩が、トランペットを立奏している姿だった。

「高校生……だったんだ。」

真琴の口から思わず漏れた言葉。考えてみれば当たり前的事だが、真琴はそれが信じられなかった。

今までいろんな団体の演奏を聴いてきたが、ここまで巧いトランペット奏者と出会うのは久しぶりだ。

全国大会で金賞を取った高校の定期演奏会で、ずっと前に聴いたトランペットソロ。それと同じくらいかも知れない。

「ああ、もう！吹部には入らないって決めたのに……。吹奏楽にはもう関わらないって決めたのに……。私ったら何でこんなに気にしてるのよ……。」

そうだ、私は吹奏楽に戻っちゃいけない人間なんだ。真琴はそう自分に言い聞かせる。

けれども身体は正直だった。ブレザーの下で、腕がゾワゾワっと鳥肌を立てているのが分かった。

真琴はもう、そのトランペットの音色のとりこになっていた。

(5) 部活ウォーズ?!

式の後には、各部活の命運を分ける一大イベントが待っていた。そう、部活の勧誘活動だ。この時になると、各部の代表、あるいはメンバー全員が集まって、壮絶な新入部員獲得戦争を繰り広げる。毎年、校舎玄関から校門までの短い一本道が、戦場と化していた。そしてその戦争が、今年も始まるうとしていいる。

ざわざわと、勧誘員達がうごめく玄関前広場。新入生が歩いてくる通路を左右から挟みこむような形で、各部のポスターやプラカードが踊っていた。

その中には、亜紀たち吹奏楽部の姿もあった。

「いいわね、さっき顔を覚えた子達はもちろん、まだ部活を決めて無さそうな子もじゃんじゃん連れてくるのよ。」

吹奏楽部の武将、もとい部長は、改めて今日の作戦を説明する。その隣では、吹奏楽部最大の敵「軽音部」が、同じくなにやら話し合いをしていた。

「俺達が狙うのは、元吹奏楽部だ。一年生が玄関から出てきたら、昨日言った名前を叫んで探し出せ。」

こそこそと他の四人の部員達に話しているのは、軽音部の部長、朽木だ。

中学時代に軽音部だった新入生はいないので、吹奏楽部出身者を捕まえようとしているのだ。音楽的なセンスもあるだろうし、吹奏楽部への入部者も奪えるので、一石二鳥である。

しかし、武将としては亜紀の方が何枚も上手だった。

「もしもし、亜紀? 今ね、A組の子達がホームルームを終えて出てきたわよ。あと、C組ももうすぐ終わりそう。」

亜紀は一年生の教室前に偵察を送っていた。吹奏楽部と親交があるチアリーディング部の同級生に、前もってお願いをしていたのだ。「亜紀、チアの勧誘も忘れないでね?」

「はいはい、分かったよ！」

もちろん交換条件。向こうからしても、文化部最大規模の吹奏楽部に勧誘を手伝ってもらえるのは、おいしい話だ。

亜紀は携帯電話を閉じて胸ポケットにしまくと、周りに聞こえないように、小声でA組担当の司と、C組担当の和久に指示を出した。

一方、ホームルームを終えた真琴は、悶々とした気持ちで廊下を歩いていた。

「ちよつとだけ、ちよつとだけ話を聞こう。」

ホームルームで担任から、外で部活の勧誘をやっていると聞かされた。

中学時代にあんな事があつた手前、吹奏楽部に入部するわけにはいかないと思いつながら、真琴は誘惑を振り切れなかった。

あの人は……あの人は一体何者なんだろう。どうやったらあんなに巧く吹ける様になるんだろう。

自然と歩幅が大きくなる。少しトイレに行きたいが、そんな事は後回しだ。

そんな、早足でズンズンと進んでいく真琴を、一哉が後ろから追いかけてきた。

「おい、待てって言うてるだろー！」

「うるさいなー、急いでるのよ！」

「急いでるって、バス時間はまだまだだぞー！」

廊下に響く二人の声。一哉には、真琴が何でこんなに急いでいるのか分からない。けれども一人で帰るのはあまりにも寂しいので、真琴を追いかけて続けた。

「うわ、すげえなこれ。」

玄関を出るとそこは戦場。その光景に、一哉は思わず声を上げた。

「おっ！来たぞ新入生！」

「ホントだ！」

二人に気づいた誰かが大声を上げると、一斉に群衆がこちらに向かつて押しかけてきた。真琴が急ぎすぎたせいで二人は、校舎を出てきた新入生第一号、第二号になってしまったのだ。

「野球部、マネジも大歓迎です!!」

「その可愛い一年生さん!サッカー部のマネジやらない?!」

「テニスは紳士のスポーツ!男を磨きませんか?」

二人はあつという間にもみくちやにされてしまった。どいつもこいつも無駄にがたいがいい。さすが強豪運動部だ。

「ど、どいてくださいー!わ、私、マネジとか運動部とか入るつもりありません!」

真琴も真琴でそれから逃れようと必死にもがくが、全く歯が立たない。出来る事といったら、大声を上げることぐらいだ。真琴はすっかり困り果ててしまった。

しかし、そんな真琴に助け舟を出してくれた先輩がいた。

「やつほー!」

その先輩は、群がる運動部員達の足元から現れて、真琴のまん前でピョイと立ち上がった。どうやら下のわずかな隙間を縫って、ここまでやってきたらしい。

「あなたが、佐野原真琴さんだね!」

「は、はい、そうですけど……。」

なんでこの人は私の名前を知ってるんだろうか。真琴がそんな疑問を抱きながら小さく頷くと、その先輩はにこつと微笑んで、突然腕を掴んできた。

「こつちきて。」

「え、ええっ?!」

ぐいつと腕を引っ張ってくる先輩。屈強な運動部員達を軽々と押しのけていくその先輩も、結構な力の持ち主だ。

そして先輩に導かれるまま、真琴は群衆の中から抜け出すことができた。

「はあ、はあ。ありがとっございます……。」

人がまだらになった玄関前広場の端っこで、真琴はここまで連れてきてくれた先輩にお礼を言った。

「だけど何でこの先輩は、自分の名前を知っていたのか。真琴が気になって聞いてみると、先輩はぐちゃぐちゃになった髪の毛を整えながらこう答えた。

「私は吹奏楽部の二年、高畑司です。実は前もって吹奏楽部出身の子達を調べてたの。」

「ああなるほど、と、真琴は納得した。そしてその先輩が吹奏楽部だという事を知って、気になっていたあの事も聞いてみた。

「あの、今日の入学式でペットを吹いてたのって、誰ですか?!」

(6) 1113のきず

真琴と司の二人は、人の群れを避けるように歩きながら、話をしていた。

「どうやら司が、さっきの真琴の質問に答えてあげているようだ。

「あいつはうちの部長で、宮村亜紀っていうんだー。」

「宮村先輩、ですか。」

「亜紀はすごいよー。富山の福原中学校って知ってるでしょ？あそこの吹部出身なの。」

「亜紀の事なのに、何故か自慢げに話す司。

でも確かにすごい。福原中学校って言ったら全国大会の常連で、最近では三年連続で金賞を受賞した強豪だ。

しかし渚高は、運動部は強いけれども文化部は弱小。吹奏楽部だって無名だし、今日見た限りでは、人数だって悲惨な状態だった。

「こんな学校に、何でそんな人がいるんだろう。」

真琴は気になって訊いてみた。すると今まで笑っていた司が、少し真剣な表情になって口を開いた。

「実はね、亜紀にはもうすぐ八十歳になるおばあちゃんがいるの。

そのおばあちゃんがこの近くに一人で住んでいてね、亜紀が中学三年のときに、一回倒れたんだって。」

「ああ、つまりお祖母さんの事が心配で、ここまでやってきたという事ですか？」

「うん、そういうこと。亜紀っておばあちゃんの事を本当に大切にしてくれて、緊急の電話があったらすぐ気づけるように、いつも携帯は胸ポケットに入れているの。落ちない様にストラップをつけてね。この学校を選んだのも、おばあちゃんの家が一番近いからなんだって。」

「いい人なんだな、と真琴は思った。

あんなに輝いた音の持ち主は、やっぱり心が暖かいんだ。そう思

うと、なんだか嬉しくなった。

司についていくこと数分間。真琴はようやく亜紀と顔を合わせる
ことが出来た。

「こんにちはー、吹奏楽部部長の宮村亜紀です！」

亜紀はこちらの存在に気づくと、笑顔で大きく手を振ってくれた。
それを見た真琴は、自然と駆け足になって、あっという間に亜紀
の目の前にやってきた。

長身ですらっとした大人っぽい人。肩を隠すくらいのロングヘア
ーが良く似合っている。

ふと胸ポケットに目をやってみると、確かに携帯電話が入ってい
た。

「あ、あの、一年A組の佐野原真琴です。こ、こんにちは！」

さつき見つけた憧れの人を前にして、真琴は若干硬くなっていた。
そんな真琴に、亜紀は優しく微笑みながら歩み寄る。

「どうしたの、そんなに緊張しちゃって？」

「じ、実は、入学式の宮村さんの演奏に感動しちゃって……今もま
だドキドキしてて……。」

真琴にそう言われて、亜紀の顔がほんのり赤くなった。

「な、なんか恥ずかしいね。でも、人にそう思ってもらえるような
演奏が出来たってことは、今日は満点かな？」

ポリポリと人差し指で右頬を搔いてはにかむ亜紀。

「そんな！満点以上ですよ！ああ、どうやったら宮村さんみたいな
演奏が出来るんだろう……。力んでないのに遠くまで飛んでいって、
キリリとしているのに、どこか柔らかくて温かみのある音。」

そう言っただけで亜紀を見つめる真琴の目は、何か惹かれるものを見つ
けた幼い子供のそれみたいで、異常なほどきらきらと輝いていた。

一方で見つめられている亜紀は、視線をあつちにやったりこつち
にやったり、そわそわと落ち着かない。

「と、ところで！佐野原さんは、どこの部活に入るかもう決めてる

の？」

このまま延々とほめられ続けたら、頭がおかしくなってしまうので、亜紀は早々と本題を切り出した。

しかしその途端、真琴の表情が曇った。

「い、いえ……まだです。」

急にトーンが下がったその声を聞いて、亜紀は自分が地雷を踏んでしまったことを悟った。

「きつと宮村さんは、この後私を、吹部に誘ってくれるんだと思います。でも、私は吹部には入れません。」

音楽的に言えばビブラート。真琴の声は震えている。

「部活はまだ決めていませんが、吹部にだけは入れないんです。私のもう、吹奏楽に関わっちゃいけないんです……。」

その声からは、さっきまでの覇気はすっかり消えうせていた。

「ごめんなさい。話聞くだけ聞いて、入部しないなんて。」

「え。う、ううん！いいよそんなの。こっちこそ無理に誘ったみたいな感じになって、ごめんね。」

亜紀はそう言うしかなかった。真琴が吹奏楽に何かトラウマを持っていることはだいたい分かったが、下手に詮索する事はできないし、これ以上彼女を部活に誘う事もできない。

妙に話しぶり空気が二人の間に流れ、この後しばらく沈黙が続いた。

「おーいー!!」

沈黙を破る助け舟、それは向こうの方から走ってきた、一哉の大きな声だった。

そういえば、あの人だかりの中に置いていったままだったっけ……。

「はあはあ、酷いじゃねーか、気づいたらあの中には俺だけ。お前はそそくさ抜け出してよ。」

一哉は真琴の所までやってくると、息を切らしながらばやし始め

た。そして腕時計を見せ付けて一言。

「バス時間、もうすぐだぞ！」

「あ……。」

まだまだだったバス時間まで、あと数分になっていた。

「す、すいません！私、そろそろ……。」

真琴は、亜紀と司にそう言うと、地面においてあったスクールバッグを手に取った。

「うん、気をつけてね。」

亜紀が一言そういうと、真琴は「はい！」と返事をして、一哉と一緒に校門の向こうに走っていった。

そんな真琴の背中を見つめながら、亜紀はボソリと呟く。

「私の演奏をあんなに喜んでくれて……もっと上手になりたいって言うって……。佐野原さんは、吹奏楽自体は大好きなんだと思う。」

その呟きを聞いて、亜紀の隣の司も、こくりと頷いた。

(7) おせっかい

バス停は学校の目の前にあった。バスの本数自体は多くはないが、通学を考慮したダイヤになっていて、普通に学校生活を送っていれば交通手段には困らない。

「ふーん、バスは夜の七時半まであるのか。でも強い部活に入ったら、これより遅く練習することもあるよな……。そういう時はどうするんだろ……。」

一哉はバス停の時刻表とにらめっこをしながら、独り言にしてはやけに大きな声でつぶやいていた。

部活の話当真琴に持ちかけるのは気まずい事この上ないが、やはり気になってしょうがない。だから、半ば強引なような気もするが、バス時刻の話から部活の話に持つていこう。一哉はそう思っ、うしろの真琴にも聞こえるような声でつぶやいているのだ。

しかし、そんな一哉の思いとは裏腹に、真琴はさつきから貧乏揺すりをして落ち着かない様子。考え事があるのか、どこか上の空といった感じで、一哉の話なんか全く聞いていなかった。

それから数分後、もうすぐでバスが来るという時だった。

「し、清水っ！ファミレス行こ！！」

唐突に、少し離れたところに見えるファミリーレストランの看板を指さして、真琴が言った。

「はっ！？も、もうすぐバス来るぞ？」

「いいから！！っ、次のバス乗ればいいでしょ！！」

「で、でも、次は五十分後……。」

真琴に腕を掴まれ、ぐいぐいと引つ張られる一哉。訳がわからず、とりあえずその場に踏みとどまろうと、足に力を入れる。

さすが元ハンド部のエース。真琴の力じゃびくともしない。そうこうしている内に、バスの影がそのファミレスの方向に見えてきた。

すると真琴は諦めたのだろう。今まで腕を掴んでいた手の力を抜いて、顔を真っ赤にしてこう言った。

「トイレ……トイレ行きたいの。もう、これぐらい察してよっ！」

「えっ……。」

なるほど、だからさつきから貧乏揺すりが止まらなかったのか。

「はやく……結構ヤバイんだから……。」

「お、おう……。」

だったら限界になる前に言えばいいのに。一哉は半分呆れたような表情をして、早足でファミレスの方に向かう真琴の後を追いかけて始めた。途中、横を通って行ったバスを恨めしそうに見つめながら……。

ファミレスに着くと、真琴は一目散にトイレに……行かなかった。恥ずかしいと思ったのか、一旦座席についてブザーを押し、店員さんが注文を訊きに来たあとにようやく席をたった。

「……ふう。女ってわかんねーや。トイレってそんなに恥ずかしいもんか？」

座席にひとり取り残された一哉は、お冷をぐいっと飲み干してつぶやいた。そしてその後頭をめぐったのは、やはり部活のこと。

「学校であいつが話してたのって、入学式でトランペットを吹いた人だよな……。」

ものすごく上手い人。小学校の頃に吹奏楽をやっていた一哉にとっても、あのトランペットは興味の対象で、深く印象に残っていた。

けれども、真琴も真琴である人とは違う上手さがある。中学の頃、式典とかの度に演奏を聴いてきた一哉は、それを知っていた。

「やっぱり勿体無いよな……あいつが吹奏楽をやらないなんて。」

テーブルに肘をつけ、はあっとため息をつく一哉。

「せっかくファミレスに来て話す時間も結構取れるんだし、もう一回説得してみるか……。」

余計なお世話なのかもしれない。本人がやらないと言っているのだから、それでいいのかもしれない。

でもあいつは、吹奏楽が大好きで、未練もいっぱいある。一哉はそれが分かっているから、放っておけなかった。

(1) 一哉の暴挙

真琴がトイレから帰ってきて、注文した品がやってくる。そしてたわいのないおしゃべり。学校が大きかっただとか、屋上からは海が見えるらしいとか、真琴はそんなことを、目をキラキラさせながら話してきた。

そして、話題が学校の立派な設備のことになったとき、一哉はここぞとばかりに部活の話の切り出した。

「設備が立派だ立派だって喜んでるけど、恩恵を受けられるのって運動部だけだよな。」

「えっ？」

不思議そうに首を傾げる真琴に、一哉は続ける。

「だって、立派なのは運動関係の設備ばかりじゃん。体育館なんて多少ボロくても授業をする分には困らないし、弓道場とか相撲場が立派でも、俺らには関係ない。それとも、お前運動部に行くのか？」

我ながら話運びが巧いと思った。

一方で真琴は、してやられたといった表情。苦笑い。

「あんた、よっぽど私の部活が気になるのね。」

真琴はそうとだけつぶやくと、スプーンをくわえてなにやら考え始めた。黒いどんぐり眼はずーっと右上を向いていて、口から伸びたスプーンの柄が、モゴモゴとせわしなく上下に動いている。

そしてその動作が止まると同時に、真琴はスプーンを口から引っこ抜いて、一言だけ言った。

「運動部もいいかもね。」

一発で嘘とわかった。しかし一哉は、何も言わずに真琴の話に耳を傾け続ける。

「最近運動不足だって思ってたのよね。運動は得意じゃないけど嫌いでもないし、この機会に運動部デビューするのも悪くないかなー

つて。」

にこにこ微笑みながらそう話す真琴。一哉はそんな真琴と視線を合わせようとするが、向こうの黒目はあっちに行ったりこっちに来たりと落ち着きがなく、結局諦めた。

「ねえねえ、私が入部するとしたらどこがいいと思う?」

あれからしばらく、真琴の一人舞台だった。切れ間なく続くマシンガントークは、途中口を挟もうとする一哉を拒んでいるようでもあった。

しかし、ようやく発言権が得られたのだ。真琴のその質問に、一哉は迷いなくこう答えた。

「吹部。」

それを聞いた真琴の表情が歪む。

「えっと、だから……運動部で」

「吹部。運動部系文化部。」

再び一哉がそう言うと、みるみるうちに真琴が不機嫌な表情になった。

「嫌がらせ?吹部には入らないって言ったじゃん。」

「でも運動部に入るつもりもないんだろ。勧誘でもみくちやにされてたとき言ってたよな?」

「そ、それは……。」

言いよどむ真琴。一哉はそんな彼女の顔をじーっと見つめる。真琴はその視線から逃げるように、目を下にやった。そしてぼそりと小さな声でつぶやいた。

「認めるわよ、もう……。吹奏楽は続けたい、もっともっとトランペットがうまくなりたい。でもあんな事があつたら、怖くて続けられるはずがないじゃん!!」

最初小さかった声は、全て言い終わる頃には大声に変わっていた。店中の人は何事かと思っただけを見つめてきたが、それは数秒の間だけだった。

「店、出るぞ。そんでもう一回学校に戻る。」

突然、一哉が真琴の腕を思いつきりつかんで、グツと座席から引っ張りあげた。

「えっ、ちょ！まだ食べ終わってないってば！！」

そう言う真琴の声を、一哉は聞こうともしなかった。そして真琴を引っ張ったままレジまでやってくると、パツパと二人分の支払いを済ませて、店から出た。

「もう一回、吹部の人たちのところまで行く。」

「は？なんでよ！私は入らないってば！！」

「いいから、ついて来い！！」

必死に抵抗する真琴だったが、やはり一哉は力強く、全く敵わなかった。黙ったまま真正面を見つめズンズンと進んでいくその横顔を、睨み付けることしか出来なかった。

(2) むかしばなし

いつの間にか、真琴は抵抗をやめておとなしくなっていた。うつ向き気味で何も話そうとせず、ただただ一哉に引つ張られている。そんな、急にしおらしくなってしまった真琴を見て、一哉は中学時代の”あの事”を思い出していた

中学時代の真琴というのは、今よりももっと快活だった。休み時間になると、真琴の座席の周りには自然とクラスメイト達が集まってきて、その笑い声が終始教室に響いていた。

けれども三年生になってからは、日に日に落ち込んでいくというか、疲れていくというか……。それでも友達の前では終始笑顔を絶やす事はなかったが、授業中にふとこいつの方を見てみると、ポーンと窓の外を眺めていたり、ストレスのせいか爪を噛むようになり、明らかに様子がおかしくなっていた。

そして、三年生の夏休み。部活の一日練習を終え、スクイーズボールを片手に、校舎裏の日陰で座り、涼んでいたときの事だ。

日が傾きかけていて、セミの鳴き声が一番けたたましい時間帯。うるさくて頭が痛くなるという人もいるだろうが、疲れ切ってポーンとした意識の中、ひんやりとした校舎の壁に背中を預け、セミの鳴き声をバクググラウンドに少しずつドリンクを飲む。この時間が妙に心地よかった。

突然、バサツバサツという鳥の羽音が聞こえて、一気に周りが静寂に包まれた。

同時に、上の方から聞こえてくるすすり泣き声に、俺は気づく。見上げてみれば、開け放たれた窓。どうやら泣き声の主は、校舎の

中にいるらしい。

オカルト話のたぐいは信じていないつもりだったが、いざこいう事を前にすると怖くなってしまった。

「ま、まさかなあ……。」

一言独り言を漏らし、わざとらしく苦笑いをする。そして立ち上がった。

「イテテテテっ」

疲労困憊のふくらはぎが攣りそうになって、しばらくその場で立ちすくむ。一分ほど経ってようやく落ちついてくると、一つ深いため息をついた後、意を決して窓に首を突っ込んだ。

「だ、誰かいますかー？」

まあ、当然返事はなかったが、その途端に泣き声が消えてしまった。そして下の方からは人の気配。

「ん？」

見下ろしてみると、そこには目を真っ赤にしてこっちを見つめている真琴がいた。俺は、何がなんだか分からなくて、窓に首を突っ込んだまましばらく立ち尽くす。

いつも元気で、いつも笑顔で、まるで太陽のような。そんなイメージとは全く違う真琴が、目の前にいた。

それからずーっと二時間ほど、俺は校舎に入って真琴に寄り添っていた。こういうときは、無理にあれこれ探るべきではないと思うから、最初は本当に隣に座っていただけだった。

けれどもしばらくすると、ぼそりぼそりと自分の中に溜まっていたもやもやを、真琴は打ち明け始めてくれた。

「部活、苦しい。」

「どんだんぐちゃぐちゃになって。」

「部長としてどうすればいいのか、分からない。」

「怖い……。」

俺は真琴の口から漏れる断片的な言葉のパーツを、必死で拾い集

めた。けれどもそうしたところで何か出来たかといえば、ひたすら「うんうん」と頷いて話を聞いてやることしか出来なかった。

でも、別れ際の真琴の言葉を聞いて、少しだけ俺は安心した。

「話聞いてくれてありがとう。なんか私らしくないことばかり言っていて、困っちゃったでしょ……。でももう大丈夫だから！」

校門の前。にこつと笑顔でそう言っつて、走り去っていく真琴。

「少しは役に立てたのかな。」

消えていく真琴の背中を見つめながら、俺はそんなことを考え、自己満足に浸っていた。

そんな出来事から十日ほど後のこと、学校を揺るがす大事件が起きた。

この頃のハンド部は、夏休みが明けてすぐにある引退試合のための練習が佳境を迎えていて、帰るのはいつも日が暮れた頃だった。しかしその日だけは、顧問の指示で一時間以上早めに練習が終わった。

部員達からは、「やったー。今日はゆっくりできる!」、「ちよつと疲れてたんだよな!」という声。皆早く家に帰って休みたいのか、いつも以上にテキパキと片づけを終え、そそくさと帰り支度をはじめた。

「お前はまたか?物好きだよなー!」

「ああ。どうせ俺と同じ方向のやつはいないからな。」

ちよつど夕暮れ時、俺が一番好きな時間帯。スクイズボトルをかかえて、久しぶりに校舎裏に行こうとしていると、同級生の谷地やちから声をかけられた。

「なあ、俺もついて行っていいか?」

「ああ、別に構わないけど。」

そう返事をする、谷地はエナメルバッグから2リットルペットボトルを取り出して、にこつと笑った。そして俺達は、荷物を部室の前に置いて校舎裏へと向かう。

「俺もなんだか今日は黄昏たくつてな。」

「はは、ミス連発だったもんな。」

「ああ。でも、コーチもあんなボロカスに言わなくてもいいだろ……。こつ見えても俺、結構傷つきやすいんだぜ。」

「傷つきやすい、ねえ……。」

俺はふと、真琴の顔を思い浮かべてしまった。いつも笑顔で元気そうでも、実はたくさん悩みを抱えている。

あれから会っていないが、あいつは一体どうしているだろうか。部活にはちゃんと行っているのだろうか。

なんだか急に不安になってきた。

何で俺は、人のことでこんな気持ちになっているのだろうか。そんな疑問も同時に生まれたが、すぐにその答えは見つかって、顔がかつくと熱くなつた。

校舎裏で一時間ほど時間をつぶしたあと、俺達二人は家路にうつと部室に向かった。そして荷物を抱え、今度は校門に向かって歩いていると、谷地が急にこんなことを言い出した。

「なんか、様子がおかしくないか？」

「え？」

谷地の人差し指の先をたどっていくと、校門の入り口あたりから学校の敷地前の生活道路に沿って、たくさん的大型車が停まっているのが見えた。

「ほんとだ……なんだ一体？」

俺達は自然と早足になった。そして段々と近づくにつれて、その車達もはつきりと見えてくる。

テレビの中継車だった。校門の周りには、記者やカメラマンと思われる人影もある。

「おいおい……なんだ一体。」

なんともいえない物々しい雰囲気、俺は立ち止まった。

けれども谷地は違った。なんとさつき以上の早足、いや駆け足で

記者達の方に向かっていったのだ。

「お、おい！」

そう声を上げてみたが、谷地は止まる気配が無い。それどころか、かわりにその声に気づいた記者達が、こっちに向かって走ってきた。

「ええーっ!？」

俺はどうする事もできず、校庭の隅の方で、記者達に囲まれる。そして尋ねられた。

「テレビ石川のものですが、ここの生徒さんですよね？インタビューさせてもらってもいいですか？」

「え、い、いや、な、なんのインタビューですか？」

しどろもどろな俺に、記者は説明をした。

「ご存じないですか。実は昨日、ここの吹奏楽部員の生徒さんが、顧問の教諭に顔を殴られて病院に運ばれたんです。今日は記者会見が開かれるという事で来たのですが、できれば生徒さんのお話も伺いたくて。」

吹奏楽部員……嫌な予感がした。そしてその予感の的中していたという事を、俺は後に知ることとなる。

夏休み明け、真琴はしばらく教室には来なかった。

危害を加えた教師は停職三ヶ月で、別の学校に飛ばされたらしい。これだけの事をやってもクビにならないのは納得が出来ず、腹が立って仕方がなかった。

そして、あの時何もアドバイスをしやれなかった自分の不甲斐なさ、それにもかかわらず、「役に立った」と自己満足をしていた自分の浅はかさ。そんなことへの苛立ちも、全部教師に対する怒りに変換されていることに気づいて、自分がもつと情けなくなって、この上なく腹立たしく思えた。

今のままでは、吹奏楽は真琴にとって、ただの嫌な思い出となってしまうそう。大好きだったものに裏切られたままになってしまうそう。

自分でも相当おせっかいだとは思ったが、とうとう真琴の腕を引っ張ったまま、校門の前まで来てしまった。

なぜ俺は、他人の事でこんなにも必死になっているのだろうか？過去の自分に対する懺悔か？それとも……。

ああ、またかつかと顔が熱くなってしまった。

(1) 花咲き乱れん、自己紹介

音楽室。中庭むきの窓からは、惜しみなく暖かな春の光が差し込み、その眩しい空間には、同じく眩しいピカピカの新入生達が、一、二

「 ああ、眩しい！清水、カーテン閉めて！！」

俺が、ほんの少し小説チックな世界に入り込もうとした矢先にこれだ。周りが現実的過ぎるのか、おのれが夢想家過ぎるのかそれは分からないが、キンキン声の副部長の指示に逆らう道理も無く、窓際の俺は重々しい音楽室の暗幕を閉めた。

「ふふつ、カーテン閉めてもまだ眩しい気がするねー。やっぱり新入生が来てくれたからかな？」

壁にある蛍光灯のスイッチを入れながら、お姉さんらしい、やさしい笑みを浮かべ、うれしそうにそう漏らすのは部長の宮村。

結局、部員の頑張りというか執念のおかげで、経験者ばかり三人の一年生を音楽室まで連れてくることできた。少ないように聞こえるかもしれないが、これでもうちの学校の文化部には上々だ。「えつとー、とりあえずこういつつて、まずは自己紹介？」

まだ若干緊張ぎみの一年生をほぐすためか、それともただ「女の子のあれこれを知りたい」という私欲を満たすためかは知らないが、西田がそんな提案をした。周りもトントンとそれに同調して、まずは部長からそれを始める。

「えと、二年B組、部長の宮村亜紀みやむらあきです。トランプットをやっています。中学の時から吹奏楽一筋で、そこそこ腕にも自信があります。分からない事があつたら、遠慮なく何でも聞いてください……あ、ちなみに富山県の福原中の出身です！」

福原中。その名前を聞いた瞬間、今まで互いに話もし辛そうだった新入生三人が、きよるきよるとそれぞれの顔を見合わせはじめた。中学時代に吹奏楽をやっていた俺には分からないが、何で

も宮村の中学は、結構この世界では名が知れているらしい。俺も最初それを聞いたときは驚いたが、彼女の技術や音楽に関する知識の豊富さを考えてみれば、容易に納得する事ができた。

「あ、なんか誤解させちゃったかも知れないけど、この部活はそんなに厳しくないからね。『びしびしシゴクぞー！』とかじゃなくて、『みんなでわいわい楽しくやるー！』って感じだから。」

宮村が一年生のそわそわに気づき、そう注釈を入れたところで、自己紹介は次の人間にうつる。

「えー、副部長でユーフォoniumの高畑司たかはたけつかさです。クラスは二のA。私も中学時代から吹奏楽部で、出身は野々市の押野中学校。あそこも少人数のバンドで、大きい音ばかり鳴らしていました。私の音楽に関するモットーは『巧さよりも迫力』！ここにいる部員たちは私を含め全員が面白い先輩です……それがいい意味か悪い意味かは分からないけど。まあとにかく、みんなの入部待つてます！」

ああ、そうか。まだ入部が決まったわけではなかった。高畑の最後の言葉を聞いて、そんなことを思い出す。そして、その間にも自己紹介は進む。

「二年D組、書記の西田美奈にしだみなだよー！パートはホルン。中学時代は合唱部でした。だからまだまだ初心者です。あ、ちなみに好きなものは可愛い女　！？」

「はい、次、清水っ！！」

スパーンといい音が鳴った！西田は頭を押さえて涙目になっている。彼女から会話のバトンを奪い取り、俺にパスしてきたのは高畑だ。俺もそのバトンをしつかりとキャッチした。

「えーっと、二年B組、書記の清水和久しみずかずひさです。あ、別に字が綺麗なわけではありません。パートはパーカッションをやっています。ちなみに中学時代は写真部で、今も趣味として続けています……え、まあ、以上です。」

本当はもうちょっと話そうかとも思ったが、とりあえずこちら辺で切り上げた。だって、後ろでは西田がピーピ、高畑と言い合いを

していてうるさいし、一年生達もそんな二人に釘付けで、俺の話なんか全然聞いてくれていないようだったし……。俺は若干凹みながら、バトンを次に渡した。

「水木翔みずきかけるです」

その瞬間、一年生が一斉に翔の方を見た。

おい、俺とのその差はいつたいなんだ！確かに翔は美形だし、声も透き通っていてかっこいいかもしれない。母性本能をくすぐるような可愛さもあるような気がする。一方俺は、確にかっこよくは無いいし、そんなに特徴も無い。でもそれはないだろう！！

「中学から吹奏楽部で、西田と同じくホルンを吹いています。ちなみにクラスは二のFです。うーん、言わなくても分かるとは思いますが、俺は男だ。最近よく『男の娘おにい系』とか言われるんだが、『娘』ではない。ちゃんとしている！もう一度言う、俺は男だ！！」

どنگり眼をぱちくりさせ、女子で言えばショート位の長さがある直毛の髪を掻きながら、平然とそんなことを言つてのける翔。おい、「ちゃんとしている」って何のことだ。新入生を前にして早速セクハラか！？

いや、まあ、こいつの変態さは十分分かっていたつもりだったが、まさかこんな場面でも出してくるとは……。このご時勢、訴えられても文句は言えまい。

そんなことを思いながら一年生の方を見てみると、彼女達は楽しそうに笑っていた。俺なんかがこんな事を言おうものなら、たちまち蔑みの視線を浴びる事となるだろうに……。世の中とはなんとも不公平である。

そんな、腑に落ちない部分を何個か抱えたまま、今度は一年生達の自己紹介が始まった。

「え、えっと、そ、その……小態千沙おこまです……。中学時代はフルートを吹いてました……。あっ、クラスは一年C組です……。そ、その、よろしく……。おねがいます。」

音楽室がしーんとなった。別に彼女が変なことを言ったわけではない。そうしないと声が聞こえなかったのだ。なんとも女の子らしい女の子という感じで、小動物のような愛らしさがある。ショート黒髪で、くせ毛をごまかす為か前髪にヘアピンをくっつけているのが、また可愛らしかった。

「えー、一年D組、宮永愛みやながめくみです。中学も吹奏楽で、トロンボーンを吹いていました。でも、そんなにうまくないです。高校でも吹奏楽がしたいなーって思っています。あ、ちなみに若干オタク入ってて、アニメとか良く見ます！こんな私ですが、よろしくお願いします！」

二人目の子は、小熊さんとは正反対で、ずいぶんとはきはきしていた。オタクなんて初対面でなかなかカミングアウトできないと思うが、どうやら彼女は違うらしい。ツインテールの髪形もそのオタク趣味の影響なのかも知れないが、決して嫌味っぽくなく、良く似合っている。こんなことという失礼かもしれないが、すこし童顔で、その幼さがプラスに働いているように感じた。

「えっと、一年E組の高山一穂たかやまかずほです。すぐ近くの武蔵中学校の出身で、吹奏楽部でした。でも、吹奏楽は吹奏楽でも、私がやっていたのはマーチングバンドで、パートはフロントピット。シロフォンとかティンパニなど、動かせない楽器専門のパートで、吹奏楽で言えばパーカッションが一番近いと思います。まだこの部活に入ると決めてはいませんが、今日はいろいろと話を聞かせてください。よろしく願います！」

最後の子も、宮永さんと同じくきはきとした感じ。でも、宮永さんとは全然違うような気もした。なんだか全体的に大人びていて話し方も場慣れしているように聞こえる。立ち振る舞いもシャーンとしていて、特に背中に竿を一本通したような、凜とした姿勢の良さが印象に残った。黒のストレートヘアで、一つ結びがよく映えている、細く長い脚も魅力的だ。まるで大正時代の女性絵、言うなれば、以前温泉街の美術館で見た、地元ゆかりの竹久夢二の絵から飛び出してきたような感じ。とても和服が似合いそうだと、俺は思わず見

とれてしまった。そしてこんな子が、自分と同じパーカッションだ
というんだから、自然と顔がにやけてしまった。

(1) 花咲き乱れん、自己紹介(後書き)

今回からしばらくは、和久目線の物語が多いと思います。つまり、和久に何らかのアクション、イベントがあるという事です！自分の中で、自分を同学年の翔と比較し、劣等感を抱くことも多い和久ですが、彼にもものすごくいい所あるんですよ！

あ、当然真琴と一哉もまもなく登場します。あと、まだまだ一年生も登場します！

次回以降をぜひ楽しみに！……僕もなるべく間があかないよう頑張るつもりです……。

(2) ほんわかほわほわ、聞き上手！

部屋にいる全員の自己紹介が終わり、とりあえず楽器を出そうかという時に、彼はやってきた。

ドアが飛んでいきそうなくらいの勢いで開き、音楽室の中に入ってきたその少年は開口一番に、大きな声でこう言った。「入部させてください！」、と

すこし唐突過ぎたと、少年はあまりにも不躰な自分の振る舞いを後悔した。部屋中の人たちが、ポカーンとした顔でこっちを見つめている。それどころか、連れてきた相棒までもが、同じような顔をしていた。

「あ、あ、す、すみません！ちょっと慌ててて、気合が入りすぎたというか」

「来てくれたんだー！佐野原さんっ！！」

我に返り、しどろもどろと言いつつ訳をしようとした途端、例のトランプペットがものすごく巧い先輩にぶった切られる。そして先輩は、俺たち二人の前までやってきた。

「あなたは……？」

顔を見つめられ、次の瞬間首を傾げられた。

「え、えーっと、佐野原と同じ中学で、同級生の江藤一哉です。突然すみませんでした。えっと……ここに入部したいと思ひまして……」

「えっ！入部希望者？本当に?!」

俺の口から「入部」という言葉を聞いた途端、先輩の顔が見る見るうちに笑顔になって、嬉しそうな声で聞き返してきた。この人は、さっきの俺の大声を聞いていなかったのだろうか？

「楽器はやったことあるの？」

「え、ええ。三年ブランクはありましたが、一応小学校のときにユーフォニウムを。」

「おっ、ユーフォニウムー！司、司ー、ユーフォニウム経験者だつてっ！」

先輩に質問されるがまま答えると、今度はユーフォの先輩がやってきた。

そしてその後も先輩達からの質問攻めは続き、いつの間にやら佐野原も巻き込まれ、いつの間にやら俺たちは楽器を持たされて、いつの間にやら

三人に、さっきやってきた二人の新入生も向かえ、いつもより活気付く部室。

とりあえず経験者ばかりだという事なので、二年生がそれぞれの楽器の新生活に付く事になった。ただ、フルートとトロンボーンは二年がいないので、そこは臨機応変に、ホルンの二人が面倒を見ている。

そして俺はパーカッション。高山さん担当。

スツと姿勢が良くって、大人びた語り口。それでもって容姿端麗、大和撫子。それはまさしく俺とは別次元の人間で、てつきりとつきにくい人かと思っていた。でも、実際に話してみると、そんな第一印象はあつという間に吹っ飛んだ。

「センパイ、私後輩ですよ。何で敬語なんですかー？そんなに私、老けて見えますかー？」

「先輩って、写真が趣味なんですよね？よく撮るのって風景ですか？人物ですか？あつ、もしかしてえっちなのか？！」

「私は、一人旅が趣味なんです！のんびり電車でゆられて、い

るんなところに行くのが好きで。青春十八きつぶとか憧れちゃいます！」

とりあえずドラムセットの前までやってきたものの、特にやることも無く、いつの間にもやら俺は、彼女と談笑していた。彼女は本当に話運びが上手くて、表情も豊かで「とっつきにくい」なんて微塵も感じなかったし、逆に楽しさまで感じた。

「はっ！？そういうえば、肝心な事を聞くのを忘れていました！」

他愛の無いおしゃべりがしばらく続いたところで、彼女が思い出したようにこう言った。

「質問なんですけど、この部活って、休みとか比較的楽に取れますか……？」

「え？ああ、まあな。特に大会を目指すわけでもないし、全体的にゆるい部活だから。」

質問をされ、自慢できる事でもないと思い、苦笑いしながら俺は答えた。

何でも彼女は実家がお店をやっているらしく、高校生になったのを期に、本格的に手伝いを始めたそうだ。この学校を選んだのも、実家に一番近いから。通学時間が短い分、手伝いの時間が多くとれるのが決め手らしい。だから、あまり忙しい部活には入れないとのこと。

「でも、親からは部活にだけは入っておけと言われてますし、私も何かやりたいと思ってますし……。」

「うーん、そういうことなら、この部活は打って付けだと思っぞ！今は辞めたけど、ついこの間まで俺も、バイトと掛け持ちしてたし。」

デジタル一眼レフカメラを買う為のバイト。本当はカメラ屋とかで働きたかったんだけども、そう都合よく募集があるわけもなく、最終的にファミレスのホール担当で落ち着いた。

「いやー、客商売って大変だよなあ……。ピークタイムのときなんか、トイレに行く暇すらなかった。」

「ああ、分かりますよーそれ！私の家もお客様相手の商売ですから。」

「にっこにこな顔をして、俺の話を一一つ丁寧に受け取ってくれ。どんな話をしても彼女はこんな感じで、俺はすっかり安心を感じていた。しかし……。」

「なあ、高山さんの家って、一体何をしてるんだ？」

「え、えつと、そ、それは……。」

彼女が唯一、答えるのをためらった質問だった。困ったような顔で、ただただ笑って見せるだけ。

そして話し上手な彼女は、いつの間にやらそれをはぐらかし、結局俺は、彼女の家が何をやっているのか、知る事ができなかった。

(3) 押さえられぬ好奇心

授業終了から午後六時まで、ただし木曜日と土日は原則休み。それがうちの吹奏楽部の活動時間だ。

他の学校の吹部が聞けば、「少なっ!？」と驚くだろうが、引退した三年の元部長も、現部長の宮村も、「それでいい」と言っていた。

全員で全国大会を目指し、朝も夜も音符に浸かり、音楽を極めていくのも良いけれど、それができるのはもっとと人数が多くて、学校のバックアップもしっかりしている吹部だ。到底うちでは叶わない。それならば、うちはうちでしかできない音楽の楽しみ方を極めれば良い。のんびりみんなと和やかに。けれどもやるときはやる!

そんな考え方が代々受け継がれてきた結果、今の居心地の良い吹奏楽部が出来上がったのだ。

「んじゃ、また明日!」

部活を終えた帰り道、俺は毎日この台詞を三回繰り返す。

最初は、学校の校門の前で自転車組に向かって一回。今日はいつものメンバーに、高山さんも混じっていて、笑顔で「さようなら」と手を振ってくれた。入部の手ごたえは上々かもしれない。

次に、バスでたどり着いた金沢駅のバスターミナルで、別のバスに乗り継ぐ西田に向かって一回。彼女は相変わらず一人で、女子がいるこちらを恨めしそうに見つめながらバスに乗っていった。

最後は、いまだ自動化されていない改札をくぐったあと、反対方向の電車に乗る高畑に一回。今日は宮永さんも一緒に、いつも一人で帰っていた高畑は、終始うれしそうだった。

「この電車は、十八時四十三分発、宇野気・羽咋方面、普通電車、七尾行きです。発車までしばらくお待ち下さい。」

高畑を見送ったあと、いつもなら俺は一人になる。しかし今日は違った。

「ほんと……さっぱり……ない！」

「……俺は……だから……バカ……分からない……な。」

「はあー?!」

俺が座ったのはボックス席。そして正面には、佐野原さんと江藤君もいた。話を聞くに、ここから二駅向こうの森本駅まで乗っていくとのこと。

隣り合う二人は、椅子に腰を下ろした途端、ひそひそ声でなにやら口論を始めた。

「失礼……あなたに……ない！」

「だって……だからな。」

「……ムカつくー!!」

一体何を言い合っているのか。気になるが、彼らの小さな声は、電車の音や乗客の声にかき消され、断片的にしか聞き取れない。

そこで俺は、カバンの中からおもむろに音楽プレーヤーを取り出すと、インナーイヤー型のイヤホンを軽く耳に装着し、曲を再生する『ふり』をした。そしてプレーヤーを胸ポケットに突っ込み、窓のサッシに肘をついて、闇に包まれ始めた外を眺め、いかにも興味が無いように装う。

すると、狙い通り彼らの声は段々と大きくなってきて

「まったく。いきなり『入部させてください!』ってさ。何考えてるのかさっぱりわかんない！」

「いやー、久しぶりに楽器を吹きたくなってな。じゃあ入部しようって。」

「へえ、つまり私は、あなたの体験入部に付き合わされたってわけですか。」

「そう文句言う割には、ずいぶん楽しそうに吹いてたじゃん、トラペット。」

「べ、別にっ!楽しそうになんかしてないし……。」

「ふーん。」

むすつとふくれた佐野原さんと、そんな彼女をいじるのが少し楽しそうな江藤君。

「彼は性格が悪いな」と、盗み聞きをしている俺が思ってみる。

「おつ、ははっ、動き出した。」

「そりゃ、電車だからねえ。」

窓の外の景色が流れ始めた。江藤君は少し興奮気味である。彼は結構、子どもっぽい一面があるのかもしれない。一方で佐野原さんは、そんな彼に対し冷やかだ。

「ところで、結局お前はどうするんだ、部活。」

しばらく窓の外を楽しそうに眺めていた江藤君が、唐突に切り出した。

「まだ決めてない。とりあえず、来週から部見学期間ですよ。いろんな部活回ってみる。」

「……つまり、まだ吹奏楽部への入部は抵抗があるってことか。」

こくりと佐野原さんが頷く。二人の間に流れる空気が、電車が動き始める前と後で、微妙に変化しているのが分かった。

「まだ不安か？ 中学の頃のこと。」

……こくり。

「そ、そうか。……でも、渚高の吹奏楽部、なんかふわふわのんびりって感じだったし、部長とか先輩達もみんな優しそうだったし、そこまで臆病にならなくてもいいんじゃないか？」

「そんなこと言ったって、仕方ないじゃない……。あんな事があったのよ。そう簡単に断ち切れないわよ……。」

流れている空気が、本当に重苦しかった。

江藤君が慎重に言葉を選びながら話す様や、佐野原さんの暗く沈んだ表情。彼女らの中学時代に何があったのかは分からないが、それが相当な事だというのは、容易に悟る事ができる。

結局この後、二人の間には居心地の悪い沈黙が流れ続け、そのまま電車は森本駅に到着した。金沢駅からの所要時間は五分程度のは

ずなのに、実に長く感じた。

「んじゃ、気をつけて帰れよ。」

何も知らないふりをして、電車から降りていく二人を見送る俺は、やはり江藤君の何倍も性格が悪いんだと思う。

このもやもやとした気分は、きつと盗み聞きをした罰なんだろう。そう思いながら、音楽プレーヤーの再生ボタンをクリックし、俺は再び窓の外を見つめた。

光源がない無い田んぼだらけの田舎町は、もう真っ暗で、ほとんど何も見えなかった。

(4) 自宅にて

駅に到着すれば、その後は自転車。十分ほど走れば自宅が見えてくる。窓からこぼれる暖かい灯りが、今日も俺を迎えてくれた。

かほく市旧宇ノ気町。金沢市から電車で三十分ほどのこの街が、俺の地元だ。

特に観光名所というものは無いが、世界的な哲学者、西田幾多郎はこの地で生まれた。

金沢市のベッドタウンとも言われ、近頃は世帯数がぐんぐん伸びているらしい。そのおかげかは分からないが、二、三年前にはすぐ近くに、映画館やゲームセンターが入ったショッピングセンターもオープンした。

決して都会ではないけれども、居心地が良く住みやすい街。まるでうちの吹部のようだとも思う。

「そういえば和久。来週の土曜、しっかり空けてあるのよね？」

「え？ああ、うん。空けてあるよ。」

父さん、母さん、妹と俺。四大家族全員で長方形のちゃぶ台を囲み、ご飯を食べていると、思い出したかのように母さんが聞いてきた。

実は来週、父さんの方の祖母ちゃんの五十回忌で、旅館に泊まることになっているのだ。祖父ちゃんが、たまには親戚全員を集めて、パァッと盛り上がりたいたいと奮発したらしい。

「なんていうホテルだっけ？」

久しぶりに二歳年上のいとこに会えるのが楽しみだという妹の春香が、うれしそうに微笑みながら聞いてきた。

「ホテルじゃなかっただろ？旅館の、えっとー、なんだっけ？」

「『そくさいや』だよ。なぎさ温泉のそくさいや。『加賀亭』ほどじゃないけど、結構な高級旅館だったはずだぞ？」

俺が答えに困っていると、すかさず父さんがそう言った。

なぎさ温泉。金沢の海沿い、俺が通う渚高校のすぐ近くにある温泉街。大正時代の美人画家、竹久夢二が、愛人笠井彦乃とともに逗留した地でもある。

あの街の街並みや風情には、なんとも言えない良さがあって、俺も何度もカメラを持って訪れた。もつとも、最近は無沙汰であるが。

「旅館かぁー。ふはぁ、楽しみっー！」

両手のひらで床をバンバン叩き、隣で子どものようにはしゃいでいる中学二年生の我が妹。もうちょっと中学生らしくならないものかと呆れてみるが、「あっちいけ」とか「死ね」などと罵倒されるよりは、ずつといい。

「温泉でツルツルスベスベになって、美味しいご飯たくさん食べて、あず姉（いとこ）といっぱいおしゃべりして、温泉街をぶらぶら散歩して」

なんとも甘ったるい声で旅館での計画を呟く春香。それを聞いていると、俺もだんだんと顔がにやけてしまいそうになる。

家族の前ではクールぶってはいるが、実際のところ、春香と同じくらい、いや、それ以上に楽しみだつたりするのだ。

ああ、亨兄さん（いとこ）は元気だろうか。今頃大学受験を控えてヒィヒィ言っているのかもしれない。

美人な仲居さんとかはいるのかな。黒髪の和服美人とか、思い浮かべただけでそそられる。本当にいたら写真とか撮らせてもらおうと、うぶな俺には無理な話。

素直に風景を撮っていよう。夕焼けや朝もやに包まれる、大正口マンの温泉街。想像しただけで腕が鳴る！

そうだよ、人物写真ポートレートなんぞより、風景写真の方が何倍も魅力的で、奥が深いんだ！

嗚呼、そう思うのであれば、何で部屋の本棚に「プロ直伝！

ポートレートレッスン」なんて言うムック本が置いてあるのだろうか。

風呂から上がり自室に戻った俺は、髪をグシャグシャとバスタオルでふき取りながら、その本を手にとって布団の上に横になる。

「女性写真は、絞りを開けると柔らかくやさしい印象となる、ライティングは半逆光が基本、ねえ……。」

すでに何度も読んだ文章。けれども実践する機会が無いから、定期的に読み返さないとすぐに忘れてしまう。

中学一年からカメラを始めて早四年。これまでに何千枚もの写真を撮ってきたが、どれもこれも風景ばかりだ。

人物写真もぜひ撮りたいとは思うけど、他人に「一枚撮らせてください」なんて言う勇氣は持ち合わせていないし、休日にカメラというおじさん臭い趣味に付き合ってくれる友達や彼女もない。というか、彼女なんて生まれてこの方できたことが無い。

「彼女がいたら、にこっと微笑んでピースとかしてくれるのかな……。」

ボソツと口に出してみて、猛烈にむなしくなった。

自分自身、顔は特段不細工ではないと思うが、決して美形などではなく、性格も極端に悪いとは思わないけれど、今日の電車での出来事が示すとおり、良いとも言えない。こんな俺に、彼女なんかできるのだろうか。

「はあ……。」

自問自答の結果、否と言う答えが出て、大きなため息をついた。

でも、案外切り替えは早い。

「ま、こんな事で悩んでも仕方ないな。彼女なんていなくても、十分今だって楽しいし、逆に拘束されないから良いのかもしれない。」

強がりとかじゃなく、案外本気でそう思っている自分がいた。

彼女の写真と言う物を撮ってはみたいと思うが、風景写真がつまらないなんてことは全く無い。そして、時間もお金も思う存分趣味

につき込む事ができる。そう考えてみれば、今だって十分充実しているではないか。

「はは、こんな事思ってるから彼女ができないんだ。」

そう自嘲ぎみに笑って、俺はベッドから起き上がり、手に持っていたムック本を、元あった本棚へと戻した。

(4) 自宅にて(後書き)

作中で登場するなぎさ温泉。これはまさに、事実を基にしたフィクションです。

なぎさ温泉という温泉街は、実際には存在しません。

ですが、モデルにした温泉街はあります。それは金沢市の山奥、富山県寄りにある湯涌温泉と、能登半島七尾にある和倉温泉です。

大正ロマンあふれる温泉地、竹久夢二ゆかりの地。この設定は湯涌温泉から。

海沿いにある温泉地。この設定は和倉温泉からです。ちなみに、高級旅館『加賀亭』のモデルも、和倉温泉のとある旅館です。ご存知の方も多いのではないのでしょうか？まあ、僕は泊まった事ありませんけど。

温泉旅館でのんびり一泊したいなー、なんて思う今日この頃です。

(1) グロッキー

週が明けた月曜日。先週の木曜の入学式や、ガイダンス漬けの金曜日も終わり、今日から通常授業が始まる。そんな新しく爽やかな日に、俺は教室の机に突っ伏して苦悶していた。

脚が痛い……ひざの裏のありえないところが痛い。体が重い。

そんな調子の俺に、クラスメートで親友の冬田正輝ふゆたまさきが声をかけてくる。

「おい。瀕死状態みたいやけど、一体どうしたん？」

心配してくれているというか、面白がっているというか……。いや、まあ、後者なんだろうけど。

「はは、日帰り撮影旅行のツケだ。」

俺はゆーっくりと机から身体を起こして、椅子の背もたれに寄りかかると、苦笑いしながら答えた。

「またかよ!？」

そして、正輝に呆れ顔をされた。

昨日俺は、カメラやレンズが入った大きなカバンを担いで、能登地方のとある小さな駅にきていた。

能登鹿島駅。能登さくら駅の愛称でも親しまれているこの駅は、その名の通り桜の名所で、この時期にはたくさんのお客が訪れる。昭和の時代、旧国鉄七尾線の開通とともに植樹された桜たちは、力強く根付き、ホームに沿って華やかなトンネルを作った。そしてそれは今もなお、時代を超えてこの地に咲き誇り、やってくる青と白の新型車両を包み込む。

そんな感動を一目見たくて、見させたくて、二時間列車にゆられてやってきたのだ。

「どうだ、すごく綺麗だろ、恋人よ。^{カメラ}思う存分、^{レンズ}瞳に焼き付けてくれ。」

そんなことを思いながら、列車と桜の共演や、花壇に植えてあったチューリップ、地面に生えたタンポポなど、駅のいたるところに散りばめられた春を、一枚一枚撮っていく。

構図を決め、露出とピントをあわせシャッターを切るたびに、カメラが喜んでいる気がして嬉しかった。

そうして、駅で過ごすこと二時間ほど。そろそろお腹も減ってきて、俺は事前に調べておいた蕎麦屋さんで昼食をとるため、金沢方向に一駅行った西岸駅にやってきた。

開業当時のままの木造の駅舎を出れば、目の前には広大な七尾湾と、牡蠣貝の直売所。看板にのぼり旗など、道沿いのあちらこちらで踊る「かき」の文字の誘惑を振り切り、目的の蕎麦屋さんにたどり着く。一見、ただの民家のようなそのお店は、中に入るとどこか懐かしく、蕎麦のいい匂いに包まれていた。

「田舎せいろとカキフライをお願いします。」
好きなところにと店員さんに言われ、俺は一直線に座敷に向かい、お品書きをしばらく眺めた後、注文をした。

グーツと足を伸ばして、深く息を吸えば、いぐさの匂いと蕎麦の匂いが鼻をくすぐる。やっぱり畳が一番落ち着くと、つくづく感じた。

「ごちそうさまです。すごく美味しかったです！」

いや、お世辞とかではなく本当に美味しかった。もちもちしていて、薫り高くて、素朴なだけけれど高級な味。

「ありがとうございます、ぜひまたいらして下さい！」

店員さんの笑顔に見送られ、俺は店を後にする。

本当はもっとゆっくりしていきたくったけれど、もう一つ行きたいところがあるのだ。あんまり時間を使うわけにもいかない。

「さあ、美味しい飯も食ったことだし、気合を入れていこう！ここからはしたたか歩くんだから。」

地図を片手に、俺は心の中でそう呟いた。

目指すところは別所岳の山頂。西岸駅の観光案内版には、十キロ先と記されていた。往復だとその倍、筋肉痛は確実である。

でも、ぜひ一度見ておきたいのだ。能登半島の地図を、この目で実際に

「で、今日はこの有様か。」

「はは、まあな。途中で迷うし道も悪いし、散々だった。」

正輝の言葉に、俺は弱々しく笑ってそう答えた。

そう、道に迷ったせいで俺は、ただでさえ長い道のりを更に歩く羽目になったのだ。その上保安林の間を縫うようにのびるその道は、落差も激しくぬかるみだらけで、想像以上に脚に負担をかけた。

「でも、頂上は本当に気持ちよかったぞ！三百メートルほどの小さな山だけど、能登半島が一望できるんだ。まさしく地図のあの形が、この目で見れるんだよ！」

「へえ……確かにそれは一回、見てみたいかも。」

「だろ?!何なら今度一緒に行ってみるか?」

「い、いや、それとこれとは話が別だよ……。」

興奮気味の俺に、正輝は苦笑い。

そう。親友でもこうなのだ。カメラを持って時には列車で、時には自転車で、時には歩きで　いくら親友と言っても、こんなに地味で面倒くさい趣味には付き合ってくれない。当然他の友達もそうだ。

だからいつも、一人旅。いや、それはそれで楽しいんだ。マイペースに行けるし、話し相手がいない分、地元の人ともふれあえるし。でもときどき、同年代の友達と一緒に、のんびりぶらぶらわいわ

いと旅をしたいなんて、思ったりもするのである。
それはそれで、きつと楽しいと思っから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7043m/>

渚高のプラバン！ ～第1楽章～

2011年7月5日03時26分発行